

児童虐待予防に向けた妊娠産褥期のメンタルヘルス

—縦断面接調査を用いたボンディング障害の解明—

金子一史¹⁾・牧野裕也²⁾・中野まみ³⁾

¹⁾名古屋大学心の発達支援研究実践センター, ²⁾名古屋大学大学院教育発達科学研究科, ³⁾桑名市子ども総合センター

<要 旨>

本研究の目的は、母親の語りを質的に分析し、ボンディング障害の全体的プロセスの解明を進めることであった。総合病院産科外来を受診した妊婦 32 名に対し、妊娠中に 2 回、産後に 3 回、合計 5 回の面接調査を実施した。これまでにコーディングが終了した 15 人、のべ 33 回分の面接について、主題分析を行った。その結果、全部で 10 個の主題が抽出され、肯定的な主題として《可愛い》《元気に生まれて欲しい》《子ども優先》《乳児との関わり》の 4 つ、否定的な主題として《お腹にいるかんじがしない》《可愛いと思えない》《疎ましい》《しんどい》《イライラする》の 5 つ、肯定的および否定的どちらにも属さない主題として《妊娠判明時の反応》が抽出された。妊娠判明時の反応に注意を払うことは、その後のメンタルヘルス支援においても有益と考えられた。また、母親が体力的な限界に至らないようにするために、母親のソーシャルサポートの状況や、乳児が育てにくい気質を持っていないかなどに留意し、育児環境を適切に整えることが重要と考えられた。

<キーワード> ボンディング障害, 妊娠産褥期, メンタルヘルス, 面接調査

【はじめに】

日本を含めた世界の精神保健分野での喫緊の問題の一つに、児童虐待があげられる。日本の児童相談所における児童虐待の対応件数は、過去最多の 20 万 7 千件となっており、6 年間でおよそ 2 倍に激増している（厚生労働省, 2022）。2020 年度における心中を除いた児童虐待による死亡事例は 49 人で、このうち 0 歳児が 32 人(65.3%)と最も多かった。主たる加害者は、実母が過半数を占めている (29 人, 59.2%)。これらは、児童虐待の予防には母親に対して、産後の早期もしくは出産前の妊娠期から支援を開始することが重要であることを示している。

近年、ボンディング障害についての研究報告が急増しており、研究者の強い関心を集めている。ボンディングの研究は、およそ半世紀前の Rubin

(1967)にさかのぼり、Brockington (1996) がボンディング障害を提唱して以降、実証的な研究報告が増加した。ボンディングとは、主として出生後 1 年間を通して生じる母親から駆動するプロセスであって、その後の子どもの人生を通して続く母親の感情状態を指す (Kinsey, 2013)。母親から乳児への感情はボンディングの主要な指標と考えられており、母親が乳児に対して良好なボンディングを形成することによって、母親の乳児に対する養育行動が引き出される。一方、ボンディング障害が発生した場合、母親は乳児に対する感情が欠如し、自分の赤ちゃんではないように感じたり、出生児への拒否感を強く持つ。その結果、親子関係に長期的な悪影響を及ぼし、児童虐待の大きなリスク要因になると考えられている。

ボンディング障害についての研究報告は、リス

ク要因を検討しているものに偏っている。そのため、ボンディング障害の全体的概要は、未だ明らかになっていない。母親の体験について、産後の記述を Brockington(2011; 2016)が行っているけれども、妊娠期からの体験についてはほとんど記述が行われていない。ボンディングの形成は妊娠期から始まっていると考えられることから、妊娠期から縦断的に検討することは大きな意義があると考えられる。

本研究の目的は、妊娠期から産後の長期に渡って面接調査を実施し、ボンディング障害の全体的プロセスの解明を進めることであった。母親の語りを質的に分析し、ボンディング障害の発生や悪化、また改善に至る過程において、母親がどのような体験を経ているのかについて明らかにすることを目指した。

【方法】

国立病院機構長良医療センター産科外来を受診した妊婦 32 名が、研究への参加を同意した。妊娠中に 2 回（妊娠中期及び後期）、産後に 3 回（産後 1 ヶ月頃、6 ヶ月頃、1 年頃）、合計 5 回に渡って面接調査を実施した。妊娠中期の初回に参加した 32 名のうち、妊娠後期の面接調査に参加した母親は 10 名、産後 1 ヶ月の面接調査に参加した母親は 24 名、産後 6 ヶ月の面接調査に参加した母親は 11 名、産後 1 年の面接調査に参加した母親は 4 名であった。あわせて、のべ 81 回の面接調査を実施した。

面接調査の所要時間は、30 分～120 分程度であった。実施場所は、研究参加者の自宅か名古屋大学の実験室といった、プライバシーが確保できる場所で面接を行った。研究参加者の同意を得た後に、面接内容を録音した。

面接調査は、インタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。インタビューガイドは、面接調査の各時期に合わせた内容のものをそれぞれ準備した。妊娠中期では、家族構成などの基本情報・仕事の状況・妊娠が分かったときの気持ち・胎児への気持ち・生まれてくる子どもへの希望などから構成されていた。妊娠後期では、身体的な変化について・生活環境の変化・出産の準備状況・胎児への気持ち・気分について・医療従事者との関係・妊娠によって感じる変化などから構成されていた。産後 3 ヶ月では、出生児の基本情報・出産について・育児について・乳児への気持ち・夫婦関係・出産によって感じる変化などから構成されていた。産後 9 ヶ月では、家族からのサポートについて・乳児への感情の変化・不適切な養育行動・価値観の変化などについても尋ねた。

本研究は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号 919）。また、国立病院機構長良医療センター倫理委員会の承認を受けた。

分析は、主題分析 (Thematic analysis) (Braun & Clarke, 2006; Clarke, Braun & Hayfield, 2015) を用いた。コーディングには、Nvivo (Release 1.7.1) を使用した。

【結果】

ここでは、これまでにコーディングが終了した 15 人、のべ 33 回分の面接について、主題分析を行った途中結果を報告する。なお、分析によって抽出された主題（テーマ）について、《 》を用いて示す。全部で 10 個の主題が抽出された。肯定的な主題として、《可愛い》《元気に生まれて欲しい》《子ども優先》《乳児との関わり》の 4 つが抽出された。否定的な主題として、《お腹にいるかんじが

しない》《可愛いと思えない》《疎ましい》《しんどい》《イライラする》の5つが抽出された。肯定的および否定的どちらにも属さない主題として、《妊娠判明時の反応》が抽出された。

《妊娠判明時の反応》この主題は、妊娠が判明した時に母親が最初に感じた感情である。妊娠時の母親がおかれている状況は様々であるため、妊娠が判った際に抱いた気持ちは、それぞれの母親で異なっていた。

嬉しいという気持ちや、予想外でびっくりしたという気持ちが語られた。「わかった時はすごくうれしくて、はい。うれしかった。(W)」「なんか全然、あの、子供を希望は、してなかったんですよ。でもやっぱりできちゃうと、何故かわかんないですけど、嬉しいとかいう気持ちは出てきた、出てきました、はい。(K)」「あー、最初はびっくりっていうか。うーん、まさかな、という感じでしたね。(V)」

うれしいという気持ちのみではなく、心配もあったと語った母親も認められた。「うれしかったっていうのがあります。あとでも、心配なこともいっぱいあったので、うれしいのと不安なのと両方です。(U)」「えっとー、すごく不妊治療にも通って待ちに待った妊娠だったんですけど、割合で言えば不安な方がやっぱり大きかったです。うれしい気持ちもあったんですけど。(X)」「嬉しさ半分、不安半分という形で、心拍が確認できるまでは、あの周りの人には誰にも言わずに。(中略)なるべくこう…よかった時と駄目だった時の気持ちを両方考えて、できるだけこうニュートラルな状態でこうその日を迎えようと思っていたので。(J)」

以下に、肯定的な主題を記載する。

《可愛い》この主題は、主として産後に母親が乳児との関わりを通して抱く全般的な肯定的感情として抽出された。母親は、乳児と関わる中で、乳児が見せる笑顔を見ることによって、自身に生じる感情として語られていた。

「生まれて、からは…だんだん、こう…可愛さが増していくというか、可愛さというかこう、愛おしさが増していくというか。本当にこう、この世の中に、こんなにこう、大事というか愛おしい存在があるのかっていう感覚が、本当に初めてだったので、すごく、それが不思議だなあって思っただ。(J)」「やっぱりちょっとだけ意思疎通ができてきたんですよ。ちょっと笑わせると大爆笑しますし、機嫌が悪いとぶいって不機嫌になるし、そうゆうのが分かってきたからかわいいですね。

(K)」「今こうやってムチムチになってニコニコ笑ってくれるとかわいいと。(G)」「にこっとするときにはもう可愛いなって思います。(H)」

また、他者から自身の乳児を「可愛い」と言ってもらうことを通して、自身の嬉しい気持ちとして表明されていた。「やっぱりこの××(地名)以外の人からかわいいねとか言われるとなんかすごいうれしかったというか。“かわいいんだ～、こんなにかわいくないのに周りから見るともしかしてかわいいんだ。”っていうのがすごいストレス解消になりました。うん。あとなんか知らないおばあちゃんとかにすごいかわいがってもらえると本当になんかこう鬱屈したものが消えていくような感じがしました。(K)」

主として産後に語られることが多かったが、妊娠中に胎動を感じた際の感情としても語られていた。「あとなんか、こないだ初めてここで見たときには、なんかすごい動き回ってたんですよ。エ

コーの。で、先生が困るぐらい動いてたんですね。で、ちょっとあの、「測れないねー」って。(笑う) そういうのを見ると可愛いなって思いますね。あ、動いてるっていう。(笑う) (L)」

《元気に生まれて欲しい》この主題は、妊娠期に胎児に対して抱いていた母親の願いとして抽出された。胎児が無事に生まれてきて欲しいという母親の気持ちとして表出していた。

「早く顔みたいになって思ってるのもあるし、本当に早く生まれてきてほしいなっていうのがどうしても先立っちゃいますね。元気に生まれてきてくれたらいいなというのはすごくありますし、無事になって。(Q)」「はい。とりあえず元気に生まれてきてほしいってそれだけです。はい。(Y)」

「まあ本当に障害とかなんかそういうのに健康で生まれてくれるかっていう心配はありますけどね。(G)」

この《元気に生まれて欲しい》という主題は、心配や不安と結びついて同時に表明されている場合もあった。「やっぱりね、いつも胎動をまだ感じない分、ちょっとおなかがやっぱり少し、まあ太ったのもあるんですけど、少しふくらみを、の時期なんですって。膨らんできてるなって思ってるんですけど。ただ大きくなったからって毎日、やっぱり生きてるかなとか心拍は止まってないかなっていうのはほんとに心配です。(W)」

《子ども優先》この主題は、母親自身のことよりも子どものことを優先する姿勢として抽出された。全て産後の時期に語られており、出産前の姿勢とは異なってきたことが語られていた。

「うーん、そうですね。妊娠する前とかはやっぱり自分が一番で自分に興味があったんですけど、

ど、やっぱり子ども生まれてからは、自分自分じゃなくて子供に、なんていうか自分は二の次というか。子どもが一番、まずは子供っていう感覚になりました。(中略) 例えば、すごいあの、お肌の手入れとか私は気を付けてて、紫外線なんか絶対当たりたくなくて当たるときは日焼け止めをし、っていう感じだったんですけど、今はそうゆう自分の肌よりも子供の例えばその、公園行きたいなら行かせてあげたいとかそういうことのほうが強くなって、もう肌とか別にどうでもいいみたいな感じになりました。(K)」

「あのーやっぱり、子どもを守ってあげたいっていう気持ちがすごい強くなったなあと思います。はい。(中略) 何と言うか、本当子ども本位に、割と生活をしていきたいなあと思うことが増えたので、そういうのは何か自分の服を買うより子どもの服を買いたいとか、そういうのは割と意外でした。何かもっと、何と言うか、自分と子ども半々くらいの気持ちで、その後も過ごしてくのかあって思ってたんで。はい。(M)」

《胎児との関わり》胎動や胎児エコーなどを発端として、母親は胎児に対して嬉しいという感情が引き出されていた。出産前で姿が見えないけれども、お腹の中で生きているという実感を得て、可愛いという感情にも繋がっていた。また胎児の成長を実感し、後の出産での我が子との出会いを楽しみにしている様子が見られた。

「あーそうですね、なんか、めっちゃめっちゃかわいいとかはないですけど、普通に、なんか動いたりとかすると、やっぱりちょっと嬉しいですかね。(M)」「どうだろう、でもやっぱり動いてくれると元気なんだなって思って嬉しいですね。そこ蹴らないでとか思ったりすることもあるんですけど、

動いてないと大丈夫かなと思ってたりするので、動いてる方が、体は大変だけど、気持ち的には嬉しいです。(Q)」

「あとなんか、こないだ初めてここで見たときには、なんかすごい動き回ってたんですよ。エコーの。で、先生が困るぐらい動いてたんですね。で、ちょっとあの、「測れないねー」って。(笑う) そういうのを見ると可愛くなって思いますね。あ、動いてるっていう。(笑う) (L)」 「そうですね、はっきり顔がはっきりしてきたりとか身体がはっきりしてきたりとかするたびに成長して、当たり前なんですけどね、成長してるなあって思ったりとか、(中略) まあ楽しさもあるし、楽しみだなって思いますね。(S)」

母親の中には、胎動を胎児からのメッセージとして体験している人もいた。「こうごめんねって言ったりだとかしたときだとか、私がこう泣いてるときとかもなんか、すごいもうおなかとかを蹴ってくれたりして、まあ、なんとなくそれがこう、大丈夫だよって言ってくれたり励ましてくれてるような気がして。(J)」 「でも胎動が強くなってきたんで、ちゃんと生きてるんだよっていうアピールをされてるようで。(G)」

以下に、否定的な主題を記載する。

《お腹にいる感じがしない》この主題は、産科的には妊娠しているけれども、実感として感じるができないという語りとして抽出された。背景には、妊娠の初期に産科的なトラブルから自宅安静を強いられたりするなど、通常の妊娠経過とは異なった状況におかれてしまったことなどが考えられた。

「あ、今はまだ胎動も感じなくて、いる感じもしない。ほんとに太っておなかが出てきたんだな

っていう、最近ちょっと出たのかなっていうだけで全然実感がないんです。なので検診でエコーを見た時だけ、あ、人間の形してるなとか動いてるなっていうのが…。具体的にそのかわいっていうのは明確になってないですね。(X)」

《可愛いと思えない》この主題は、主として産後に母親が乳児との関わりを通して抱く全般的な否定的感情として抽出された。背景には、出産時において出生児の顔がうっ血していたり、大きく腫れていたりするなどし、想像していた外観とは違うと動揺したことが考えられた。

「生まれた時は、下の子が生まれた時は下の子は全然かわいくなって、上の子がかわいくてしょうがなくてっていう関係だったんですけど。(中略) そうですね、このまま全然かわいくなかったから、やっぱりなんか上のこと下の子で育て方に差も出てくるだろうし、親からも愛されない下の子ってなんてかわいそうな子だろうとか思ってすごい心配でしたね。(中略) 生まれた時、顔がパンパンになってて、もう全然かわいくなって。親にも親戚にもちょっと不細工だねって言われて、たぶん周りもそう思ってるだろうっていう。(K)」

以下は、今回の対象となった出生児ではなく、長子の時を思い出して語られた内容ではあるけれども、可愛くないという気持ちについて語られた。「なんかね、すごい息子のときは、ちょっとこんなことを言ったら、ちょっと変な親というか、いけないって思われるのかもしれないんですけど、かわいと思えなくて、全然最初は、ただ大変な存在、ただもう何て言うんだろう、とにかく早く大きくなってくれと思って。もういつまでこの状態が続くんだとか、そういうので、みんな何

が可愛くてかわいいって言ったんだろうってちょっと思ってたところがあったんですけど。(Q)」

《疎ましい》この主題は、主として産後に母親が乳児との関わりを通して抱く全般的な否定的感情として抽出された。特に、出生児が泣きやすく、一旦落ち着いても再度すぐにぐずってしまう場合には、鬱陶しい、放っておきたいという感情が強まっていた。

「そうですね、妊娠中は特に思ってたんですけど、産後はもう、うっとおしいの本当に一言で、全然かわいいと思わなかったです。(中略) やっぱり常に泣き続けている、何をやっても泣いている。だっこしても何やってももう嫌がって嫌がって泣く、床におろしても泣くっていうのがあって。で、また声もうるさい。顔もかわいくない。あれですかね、ちょっとひどいんですけど。正直本当に後悔していたと思います。(中略) あとはあんまり世話しないっていう。世話しないっていうかまあ、衣食住はやってたんですけど、あやすとかニコニコ笑いかけるとか。もう何やってもとても無理だと思って、ちょっと放置していたと思います。(K)」

《しんどい》この主題は、母親が出産後の育児に追われてしまった結果、疲労困憊となって体力的に限界となる状況として抽出された。夜間授乳や夜泣きへの対応を迫られる中、母親自身の睡眠が寸断されてしまい、自身の健康が阻まれる様子が語られた。

「(しんどくなることは) 精神状態は無いんですけど、体力はちょっとありますね、疲れたっていう。立ちくらみとか、そういうのは結構何回か。精神状態はないです。(中略) 体力はちょっとしん

どいなあと思うことが何回かありました。(H)」

「寝るときまで機嫌が悪いときもあって、寝付きがすごい悪い日とかもあって。そういう日は本当こたえるんですけど。こっちも寝なくなっちゃうので。うるさいって。その日はちょっとこたえますね。もう腹は立たないんですけど、まあイライラはするか。どうしようとしたらとは思わないんですけど。(中略) もう勘弁してと思いますね。やかましいなどは思いますね。(E)」

「そうですね、ありました。特に下の次男が結構長くまで、何か月くらいだったかな、9 か月くらいまで結構な夜泣きをしていたので本当にストレスフルでした。(中略) 起きてまあ寝るんですけど、その次起きるまでの時間がすごく短くて、本当に細切れ細切れで起きちゃうのでその時は本当に次男の発達も心配でしたし私もすごいストレスフルでした。(K)」

《イライラする》この主題は、母親が出産後の育児に追われ、心の余裕がなくなってしまった結果、苛立ってしまう状況として抽出された。苛立ちは、出生児以外の家族に対して向けられる場合も語られた。また、自身の体調が十分でない時の苛立ちを語る母親も認められた。

「とにかくちょっとやさぐれていた感じですが、やっぱり。物理的にも大変ですし、下の子はギャーギャーうるさいし、全然かわいくないし。上の子はいい子なんですけど、その時も。やっぱりね、もう叩いたりちよっかい出すとカッチーンってくるし。そうゆう何かにつけてちょっとイライラしてたと思います。(K)」 「こんなイライラしてばかりいてなんか本当にごめんねっていうことをよくいつも言ってるんですけど。なのでやっぱり申し訳ないなっていうのはいつもあります。

(J)」

以下は、出生児に対してではなく、長子や夫に対してイライラするという語りである。「やっぱりちょっと長男に対してのイライラであったりとか、ほんと申し訳ないですけど旦那さんに、ほんとよくしてくれてるのに、そのやさしさが逆になんかちょっとイラっとしたりとかするときがあって、ほんとには感謝しなきゃいけないのに、そのイライラしてる自分にさらにイライラするっていうのはありますけど。まあでもだいたい怒ってるのは、息子のことですかね。(S)」

【考察】

妊娠判明時の反応については、これまでもボンディング障害と関連するという報告がある（例えば、Nakano, Kaneko et al., 2019 など）。Nakano et al., (2019)では、妊娠が判明したときに嬉しかったと答えられなかった母親は、産後4ヶ月児健診でのボンディング障害のリスクが約2倍となっていることが報告されている。家庭や仕事の状況から、予定外の妊娠を受けいることには困難があり、妊娠に対して否定的な感情を持つ場合、その後のボンディングの形成が阻害されないか、注意深くフォローするのが望ましいと考えられる。周産期メンタルヘルスに従事する専門職は、妊娠早期から妊婦とコンタクトをとることができる点で、重要な役割を果たすことができる。妊娠判明時に、妊婦がどのように受け止めたかに注意を払うことは、その後の妊産婦の全般的なメンタルヘルス支援においても、有益となると考えられる。

ボンディングが形成される背景として、《可愛い》《元気に生まれて欲しい》《子ども優先》などの肯定的な主題が抽出された。これらの主題は、

主として産後の母親と乳児の関わりを通して母親に生じる感情として語られていた。母子の相互作用がボンディングの形成要因となることは、これまでも多数の報告がある（例えば、Brockington, 2003 など）。産後に、母親は乳児から直接微笑みかけられたり、自ら語りかけるなどしながら、乳児への肯定的な感情を強めていく様子が見受けられた。これらの主題は、母親のボンディングの形成をより強固にしている側面があると考えられる。

一方、本研究では《可愛いと思えない》《疎ましい》《イライラする》《しんどい》などの否定的主題が抽出された。《しんどい》は、体力的な限界から疲労困憊となってしまう様子が、《イライラする》は、育児に追われて余裕がなくなってしまう様子が語られていた。産後の母親が体力的な限界に至らないようにするためには、母親が必要十分なソーシャルサポートを受けている必要がある。ソーシャルサポートは、母親のボンディングと関連することも示されており（金子他, 2008）、母親が十分なソーシャルサポートを得ていないと考えられる場合は、速やかに母親をとりまく育児環境を整えることが重要と考えられる。

また、《疎ましい》《しんどい》《イライラする》では、出生児が泣きやすかったり、夜泣が強いことなどが語られていた。これらは、出生児がむずかりやすくなだめにくいなどの、育てにくい気質に言及していると考えられる。育てにくい気質の子どもは、ボンディング障害のリスク要因であることが報告されている（Takács et al., 2020）。母親が、産後の育児で疲労困憊したりイライラしたりする背景に、育てにくい気質などの出生児の要因を見落としていないか留意する必要がある。出生児の要因を見落としている場合、母親をやた

ら励ますことは、かえって状況の悪化を招くだけになりかねない点に注意する必要があるだろう。

今後の課題として、残りの17名についての面接48回分の分析を進めることがある。本報告はあくまでも中間報告であり、早急に残りの分析を終了させる予定としている。妊娠期から産後にかけてボンディング障害についての面接調査を行っている研究は、非常に限られている。本研究で収集した面接のデータを通して、ボンディング障害の解明および支援方策の提言へ繋げることが、大きな課題として残されている。

【謝辞】

高橋雄一郎先生・松井雅子先生（現所属：岐阜県立総合医療センター）、千秋里香先生（現所属：メイプルベルクリニック）には、調査の実施に当たって多大な支援と協力を頂きました。また、面接調査に参加頂いた32名の皆様に、こころより深く感謝いたします。

【引用文献】

Clarke, V., Braun, V., & Hayfield, N. (2015). Thematic Analysis. In: Smith, J.A., Ed., *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods*, SAGE Publications, London, 222-248.

Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3(2), 77-101.

Brockington, I. (1996). *Motherhood and mental health*: Oxford University Press.

Brockington, I. (2016). Emotional Rejection of the Infant: Status of the Concept.

Psychopathology, 49(4), 247-260.

Brockington, I. (2011). Maternal Rejection of the Young Child: Present Status of the Clinical Syndrome. *Psychopathology*, 44(5), 329-336.

Rubin, R. (1967). Attachment of maternal role .1. Processes. *Nursing Research*, 16(3), 237-245.

金子一史・野邑健二・田中申明他 (2008). 母親の抑うつと母親から子どもへの愛着に関する縦断研究-妊娠中期から産後1ヶ月まで- 児童青年精神医学とその近接領域, 49, 497-508.

Kinsey, C. B., & Hupcey, J. E. (2013). State of the science of maternal-infant bonding: A principle-based concept analysis. *Midwifery*, 29(12), 1314-1320.

厚生労働省 (2022) 令和3年度 児童相談所での児童虐待相談対応件数

<https://www.mhlw.go.jp/content/001040752.pdf> (2023年6月24日参照)

Nakano M, Upadhyaya S, Chudal R, Skokauskas N, Luntamo T, Sourander A, Kaneko H. (2019). Risk factors for impaired maternal bonding when infants are 3 months old: a longitudinal population based study from Japan. *BMC Psychiatry*, 19, 87.

Takács, L., Smolík, F., Kaźmierczak, M., Putnam, S. P. (2020). Early infant temperament shapes the nature of mother-infant bonding in the first postpartum year. *Infant Behavior and Development*, 58.